

残機 ∞ で最弱になった
俺の強制リトライライ
フ

クロトダン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アンリマユ。

Fate/hollow ataraxiaに登場するエクストラクラス：アヴェンジャーのサーヴァント。

そんなアヴェンジャーの姿にいつの間になつていた俺は人を炭に変える化け物やその化け物を歌いながら倒していく女がいるどうみてもヤバそうな世界にいる。

オイオイ：こんな最弱の身でどうやってこの世界を生きろつて言うんだよ。

どういう訳か何度も死んで、何度も死ぬ前の時間に甦るホロウにあつた死に戻り状態（しかも残機∞でキツイわ）

まったく……神様って奴は俺の事が嫌いなのかね？

目次

| | | | |
|-----------------------|----|----|------------------------|
| リトライ0：俺は最弱よ！ | 1 | | |
| リトライ1：いや、ムリゲーだろこれ | 10 | | |
| リトライ2：雑音VS残骸……なんてな | ? | 30 | |
| リトライ3：嘘は言ってねーよ？嘘は | 52 | | |
| リトライ4：ガングニールって、増えるのか？ | 63 | | |
| リトライ5：うっわ、エツツツツツ！ | 68 | | |
| リトライ6：あ、あれはもしかやエクスカリ | | | |
| リトライ7：ムリゲー再び…… | 87 | 77 | (光 に吞まれた) !?!?!? |

リトライ0：俺は最弱よ！

—主人公視点—

アンリマユ。

Fate/hollow ataraxia に登場するエクストラクラス：アヴェンジャーのサーヴァント。

アプリ、Fate/Grand Orderでも最弱の星0サーヴァントとして登場しており、そんな彼を知るファンの人気もある（俺もその一人だ）

姿は影を人型に見えるマツクロクロスケの他に少年の姿で黒髪に褐色の肌、更に全身を走る動く怪しい刺青をして赤い聖骸布を額と腰に巻いてある。

FGOでは刺青が青く光っている姿もある。

「この世界すべてを探してみても俺より弱い英霊は存在しない」と認める自称最弱の英霊。

しかし「英霊クラスの超人であろうと、人間である限り俺には勝てない」とも豪語する（しかし、速さで「犬」と「蜘蛛」には敵わないと述べている）

…で、なんで俺がアンリマユの説明をしているのかというところ——

「そのアンリマユになってんだよなあ…、はあ……」

そう、気づいたら俺は Fate/hollow ataraxia に登場したアヴェエンジャーのサーヴァント、アンリマユになっていた！

イヤね、俺はいつも通り FGO でアンリマユをメインパーティーに入れてプレイしていつも通り彼のクソツタレ宝具を出した後、ボコられながら戦闘から離脱する彼を観た後、アプリを閉じて明日に備えて寝て次に眼を開けたら――

「気付けば森の中とき、ハッハッハッ……笑えねーよクソツタレッ！」

悪態を吐きながら目の前の木に右拳を叩きつけた。

「……………イツ、テエエエエエエエツ!!」

その直後に物凄い痛みが走り右手を抑えて痛みが引くまで地面を転がり続けた……

「さ、流石はアンリマユ……。最弱の名は伊達ではないってことか、オオオオオオオオ……まだイテエエエエ……」

自身の手でアンリマユの最弱っぷりを体験した後、漸く痛みが引いてから改めて周りを見渡す。

「てーかここは何処だよ？アンリマユになったって事は俺は聖杯戦争に呼ばれたのか!?」

と身構えたがサーヴァントとして召喚されたら、聖杯から予備知識が頭に流れないのを見ると聖杯戦争ではないと解り、では召喚したマスターは？と探してみるが誰もいない。

「ウーン……まあ、いいか！適当に歩けば人がいる施設か舗装された道に出られるだろ！ウーン、多分！」

考えても何も変わらないと判断して、とりあえず森から出ようと俺は歩き出した。

・ ・ ・

— 数時間後 —

「ヤベー……迷った」

おつかしーな、真っ直ぐ歩いたつもりだったんだけど歩いてても歩いてても森、右を見て
も森、左を見てても森、上も見てても森、森、森、THE MORI！

ハイ、そうです！俺、絶賛迷子中デース！ハッハッハッ！

「とまー、自虐ネタはここまでにして……マジでどうする？サーヴァントになったから空腹の心配はないけど、マスターがいないから魔力の補給とかどうやるか……ん？」

視界の端に白い建物が見えた。

「ヒヤツハー！漸く見つけたぜー！スンマセーン、ちよつといいですかー……つて、なんか煙が上がってる？」

長時間森の中を歩き続けたせいなのか俺はハイテンションで建物に向けて走り出した（俊敏A）

が、叫びながら建物に近付いていくと建物から煙が上がっている事に気付いた。

「ウーン、なんでだろ？いつもの俺なら慌てふためくのには落ち着いていて、しかも逃げる人を見たら——」

——殺したくなってきた。

「つと、危ない危ない。これがアンリマユの本能か……危うく呑まれるところだった」

フーツ、と息を吐いて改めて建物を見る。

（逃げてる人の服装を見るとここは研究所みたいだな？あの慌てようから察するになんかヤバソーなモンの実験をして、それが失敗して大慌てつてところか？

自業自得と思うが何の実験なのかちよつと見てみるか♪
俺はケケケと笑いながら研究所の中に入って行った。

・
・
・

「フンフンフフーン♪お？なんだあの化け物？」

研究所の中をしばらく歩いていると崩れた壁の向こうに真っ白な化け物が暴れているのを目撃した。

「あの化け物暴れているからあの人間達は逃げていたのか……ん？」

化け物を観察していると化け物から少し離れた入り口からまだ幼さを残す美少女が化け物に向けて歩いてきた。

（ほっほーう。なかなかの美少女……これは将来は美人になるぞ）

思考が大分アンリマユに寄ってきた俺は少女の顔を見てそんな感想をしていると
……

「Seilien coffin air get—lamh tron」

少女が歌を唄うと少女の姿が大きく変わり、少女は白銀の鎧を纏っていた。
なんだあれ？と少女の姿を観察していると

「セレナ！」

「お？」

少女の名前を叫ぶ声が聞こえ、顔を向ける。

「やっぱりダメよセレナ！絶唱を唄わないで！」

ピンク髪のもう一人の美少女が鎧を纏った少女の名前を叫んでいた。

（てか絶唱って何？唄ったら駄目って、唄ったら少女が死ぬのか？）

俺が疑問を浮かべていると話し合いが終わったのか鎧の少女が笑顔を涙を浮かべているピンク髪の少女に向けた後、化け物に近付いていく。

その様子を観ていた俺はどうなるのか気になりじつと鎧を纏った少女の動きを観察しようとしたら――

——お願いします——

俺の耳にピンク髪の少女の声が、嫌……

——どうかセレナを助けてください！神様！——

——願いが聴こえた。

「神様、ねえ……。ハッ、こんな悪神の肩書きだけのサーヴァント擬きがいるのにそんな願いを言うなんてなあ……。運がないねえ……」

俺は左手で額を押さえてヤレヤレと首を振る。

「本当に運がないねえ……。俺は……」

聖杯と癒合したアンリマユの身体だからか、それともこの姿の基になった殻少年の影響だからか、俺は口元を歪めて両手に「右齒ザリチエ噛」と「左齒タルウイ噛」という奇形の短剣を握りしめ、獣のような姿勢で走り出し少女と化け物の間に入り込んだ。

「え？誰で「イヤー本当に憑いてないねお嬢ちゃん。なんてたつて助けにきたのが最低最弱のサーヴァントの俺だからな！」

俺があっさり負けたらさっさと逃げた方がオススメだぜ？ハッハア！なんせスペ○ンカー並みの紙耐久だからな！30秒持ったらいいほうだ！

俺もできれば逃げたいけど助けてくださいと願われたら叶えてあげねーと！

ほら俺、これでも（名前だけの）神様だし？」

少女の質問を被せるように早口で言った後、化け物に向けて【右齒嚙咬】と【左齒嚙咬】を構える。

(……嫌、無理だろこれ。人間相手ならともかく、初戦闘が化け物つてこれなんてムリゲー?)

まあ、とりあえず――

「いっちよ、やってみますかね!」

俺は地面を駆け出し、化け物に向けて飛び掛かり【右齒嚙咬】と【左齒嚙咬】を振り下ろした!

――バキイツ!――

「グハアツ!」

と同時に化け物が突き出した拳が直撃した直後、身体感覚が無くなるのを感じながら俺の意識はそこで途切れた。

「あり？なんで元の場所に立っているんだ？」

次に眼を開けたら最初に目覚めた森の中に立っていた。

これもしかして……

「……無限の残骸？」

了

リトライー：いや、ムリゲーだろこれ

—無限の残骸—

アンリミテッド・レイズ・デッド

Fate/hollow ataraxiaでアヴェンジャー：アンリマユのマス
ター：バゼット・フラガ・マクレミツツが彼と契約した時「死にたくない」と願い、そ
れを四日間しか現界してなかったアンリマユが彼女の願いを歪に叶え、繰り返される四
日間の中で四日目の夜を経過またはそれまでにアヴェンジャーかバゼットのどちらか
が死亡した場合に現れる知性を持たない黒い獣^{怪物}。

黒い獣はアヴェンジャーの変異体であり、彼を妨害し彼の根底的な望みである「繰り
返される四日間」を延々と続けさせようとする無意識の分身。

赤い弓兵の「無限の剣製」と似た名称であるが、宝具ではなくアヴェンジャーの形態
の一種であり、アヴェンジャーであつた残骸^{成れの果て}である。

—主人公視点—

「……無限の残骸」

アンリミテッド・レイズ・デッド

鎧の少女を助けに入り、化け物に飛び掛かった俺は化け物が突き出した拳によって返り討ちにあい意識が途切れ、次に眼を開けたら最初に目覚めた森の中に立っていた。

なんで死んだのに最初の森の中にいるのか考えていると、ある単語が頭をよぎった。

アンリマユ、死に戻り、そして強制リトライ。一見バラバラに思える単語だが、俺にはそれに心当たりがありその単語を声に出した。

(けど俺はバゼットと会ってないし、それどころか契約すらしてねーのに、なーんで死に戻っているんだ?)

「まあ、考えてもこの疑問が解決する訳じゃないし、それに本当に死に戻っているならあの化け物がまだ暴れているだろうけど、行かなくていいな。

あのお嬢ちゃんには悪いが最弱の俺が行ってもまた殺られるのが目に見える。ハイ、この話し終わり!」

そう言ってクルリと後ろを向いたら――

「……………ハ?」

――黒い怪物獣が俺の目の前に現れた。

「……………嘘だろ?なんで、お前が……………(こ)に?」

俺は黒い獣^怪に声をかけるが、黒い獣はそれに答えずただ無言で佇んでいる。

黒い獣の姿には見覚えがあった。

Fate/hollow ataraxiaで出てくるアヴェンジャー：アンリマユの無意識の分身。

繰り返し四日間を延々と続けさせようと彼を妨害する残骸。

その黒い獣^物が俺の前に立っていた。

「おいおい、黙ってないでなんか喋って……」

質問に答えない黒い獣にもう一度質問しようと声をかけた瞬間――

――ドスツ――

「……………み……………ろ?」

ドスツという鈍い音がしたのと俺の腹部にナニかが貫いた。俺はゆっくりと視線を自分の腹を確認した。そこには……

「……………ア?」

そこには、黒い獣の鋭い爪が俺の腹を突き刺していた。
 「……………ア……………ア?……………ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
 !?!?!?」

漸く認識が遅れ、激痛で汚い悲鳴をあげ、黒い獣は一度俺の腹から爪を引き抜き、支えがなくなった俺の身体はそのまま地面に倒れた。

普通の人間だった頃の俺だったら激痛に耐えきれず気絶していただろうがサーヴァントになったおかげか気絶する事も出来ず、俺は歯を食い縛り風穴が空いた腹の痛みを我慢して、目の前に立つ黒い獣に何故と問いかける。

『……………カ…、……………エ…、……………リ……………ユ』

「ハア……………ハア……………ア？……………今、なんて……………う？」

獣の獣の口から声が聞こえ、なんて言ったのか目の前に立つ黒い獣に質問する。

『……………ネ……………エ、……………ア……………ユ……………』

「ハア……………ハア……………ハア……………だからア、なんて言ったのか……………ハア……………わかんねーよ……………ッ!？」

地面に両手をつけて両腕に力を込めてゆっくりと身体を持ち上げながら、顔を上げた直後、黒い獣の顔が俺の顔に近付けて獣臭い息を吐きながら聞き取れなかった言葉を口にした。

——願イヲ叶エテミセロ、アンリマユ——

「……ブハアツ……ハア……ハア……ハア……ッ!? 今のは、一体?」

次に眼を開けた直後、自分の腹を抑えて黒い獣がいないか周りを見渡し、黒い獣がないとわかった後ゆつくりと息を吐きながら呼吸を整えた。

「ハア……ハア……ハア……フウ。なんだったんだアイツは? つーか、また死に戻ったのか俺は?」

—願イヲ叶エテミセロ—

あの黒い獣は俺にそう言った。

願いを叶えろ、どうしてアイツはそう言ったのか考えていると一つだけ心当たりがある事を思い出した。

—セレナを助けてください! 神様!—

最初に死ぬ前に聴こえたピンク髪の少女の願い、つまりあの化け物からセレナと呼ばれた少女を助けないといけないと?

「いや、ムリゲーだろこれ」

元はただの一般人が英霊アンリマユになったとはいえあんな化け物に一人で立ち向かうのは無理だろ普通。

仮に最弱ではない英霊アンリマユになったとしても、物語の主人公みたいに勝てる訳ではないだろ。

「やっぱり願ひ事はなかつた事に出来ねーかな？……ツ!？」

——ゾクツ——と冷たい殺意が背中を駆け巡った。

俺はまさかと思いつつ後ろを振り返ってみると——

『グルルルル………ツ』

『グウウウウ………ツ』

木の影から黒い獣がこちらを見て唸り声をあげていた。しかも一匹増えてるし。

「クソツ！あー、ハイハイ！やればいいんだろ！やれば！」

黒い獣に見張られながら俺は悪態を吐いた後、研究所を見つけた方向へと駆け出した。

研究所に着いた俺はセレナという少女を助ける為に再びあの化け物を倒すまで何度もリトライを繰り返した。

——そう、何度もね——

——リトライ五回目——

化け物の背後を取りその背中を攻撃しようとしたが振り回した腕に撥ね飛ばされて死んだ。

——リトライ十回目——

化け物が伸ばした腕に捕まり、そのまま身体を握り絞められて死んだ。

——リトライ十五回目——

距離を取ったが化け物が投げた瓦礫に頭が直撃して死んだ。

——リトライ三十七回目——

化け物に両足を掴まれ、身体を縦に真っ二つに引き裂かれて死んだ。

—リトライ四十二回目—

だ。
漸く化け物に傷をつける事が出来たが、化け物が振り下ろした脚に踏み潰され死んだ。

—リトライ七十八回目—

化け物に頭を砕かれ死んだ。

—リトライ百三回目—

首の骨を折られて死んだ。

—リトライ百二十六回目—

下半身を食いちぎられて死んだ。

—リトライ百五十九回目—

脳みそをぶち撒かれて死んだ。

—リトライ二百七回目—

頭を喰われて死んだ。

—リトライ二百六十一回目—

身体を引きちぎられて死んだ。

—リトライ三百八十五回目—

腹をぶち抜かれて死んだ。

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

―俺は、また死んだ―

・ ・ ・

―リトライ ■■■ 回目―

普通なら発狂してもおかしくはないくらい死に戻りリトライを繰り返しているが、アンリマユになつたおかげか、又は俺自身が既にイカれてしまつたかも知れない。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ツ！たく、いい加減倒されてくれよ化け物よオ？」

何度目のリトライか数えるのを忘れた頃、漸くアンリマユの戦闘方法を理解出来て、あの化け物の攻撃から当たらずに傷を付ける事が出来るようになった。

まあ、何度もリトライを繰り返しているから動きをある程度先読みしてるからな。

おそらく今の俺の眼は鬼畜難度の死に覚えゲーを徹夜でクリアしたような目をしてるだろうな（白目）

両話 気を取り直して

ヒット&アウェイを繰り返し、同じ箇所を攻撃をし続け、フェイントを交え獣のような戦い方のおかげでかれこれ3時間も戦闘を続けられている。

「ハア…ハア…ハア…ツ…こっちはもう体力の限界なんでな、そろそろリトライするの
も飽きてきたところだ。

だから今度はさ………

テメーが死ぬ番なんだよ！化け物よオツ!!」

そう叫んだ俺は、両手に持つ【右齒噛咬ザリチエ】と【左齒噛咬タルウイ】を握り締め獣のような低い姿勢になって化け物に向けて駆け出した！

「ツ!!!」

「つとお！当たるかよノロマ！」

「ザシュツ！ザシュツ！」

「ツ!!!」

化け物が振り下ろした拳を身を低くする事で紙一重に避け、それと同時に奴の脚の関

——逆しまに死ね——

黒い獣の身体が白く光り、黒い身体に隠れていた赤い血管のようなのが浮き彫りになる。

——ヴェルグ・アヴェスター偽り写し記す万象——！——

俺の身体が光った直後——

「**■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■**——ツ!!!!!!」

——化け物の身体から大量の血のような液体を撒き散らしながら俺の身体から口を離し地面に倒れた。

地面に倒れた化け物の身体には、先ほどまで俺が噛み付かれていたのと同じ箇所に着目された傷が浮かび上がっていた。

——ヴェルグ・アヴェスター偽り写し記す万象——

アヴェンジャー：アンリマユの持つ唯一の宝具であり、三流以下のクソツタレ宝具。

自身が受けた傷をそのまま相手に返す【報復】という原初の【呪い】。

自身が受けた傷を負わせた相手の魂に転写し共有する単純であり強力な【呪い】。

仮に右腕がなくなった場合にこの宝具を使うと、相手の右腕が同様に吹き飛ばないが、右腕の感覚がなくなり動かすことも出来なくなる。

条件さえ満たせば、全ての相手に通用する。

高い魔術耐性を持つサーヴアントであっても問答無用でこの【呪い】にかかる。

また、【共有の呪い】であるためアヴェンジャーが自身の傷を癒さない限り、相手の傷も癒えることはない。

ただし、発動は一人につき一度きりでしかも放つのは自動ではなく任意発動。

自分が軽傷ならば敵にもさしたる効果は与えられず、かつ今後同じ相手には使えなくなる。

更に、致命傷を受ければ使う前に自分が死亡してしまうので発動できない。

この宝具の所有者であるアヴェンジャー：アンリマユ曰く

「傷を負わねば攻撃できない、クソツタレの三流宝具」とのこと。

簡単に説明すると受けた自身の傷を相手に転写するカウンター宝具である。

使いどころが非常に難しい上、互いに重傷を負って動けないという困った状況が出来る（まさに今の俺のように）

—ズバアッ！—

——化け物の身体中に突き刺さっていた大量の【右歯嚙咬】【左歯嚙咬】が俺の魔力に一斉に反応してその形状を大きく変化して、化け物の身体を切り刻んだ。

身体を切り刻まれた化け物は声をあげる事もなく、ズブズブと身体が溶け崩れていき、化け物がいいた場所には丸い玉みたいな物が残っていた。

「へ、へへ……漸く死ぬ前にくたばったのか、……クソツタレ……」

化け物が完全にくたばったのを見届けた俺は立ち続けるのが限界になり、そのまま瓦礫まみれの地面に後ろから倒れ込んだ。

（あー駄目だ、魔力もスツカラカンでもう指一本も動かせねー。あ、これで死んだらまたリトライしなきゃならないのか？うへー、嫌だ嫌だ。これで何回目のリトライをしたんだ俺は？）

視線を崩れ落ちた天井に向けてここまでリトライを繰り返して化け物と戦った事を振り返っていると……。

「大丈夫ですか！しっかりしてください！」

「お？よう、お嬢ちゃん。漸く落ち着いて話せるな」

漸く助ける事ができた少女が倒れている俺の側に寄り添って来た。

「なんで私を助けて……っ！ひどい傷……」

俺の身体中に見える傷を見た少女は胸を抑え悲しい顔を浮かべる。

今の俺の状態は左腕が千切れ、首から胴体まで先ほどまで化け物に噛み付かれ心臓は免れたが化け物の牙が肺を貫通して呼吸がしづらくなっている。

それの他にかわしきれずに顔の頬がパツクリと割れていて、更に背中には吹き飛ばされた時に背中を打ち付け小石や瓦礫の破片が肉を抉るように入りこんでそこから流血していた。

「待っててください！今ママ達を呼んできますから、すぐに傷の手当てを「あー、悪いけどそれは無理だ」え？」

少女が俺を助けるために人を呼ぼうと立ち上がるのを俺は倒れたままそれを断った。

「イヤー、ありがたい話だけでもう手足の感覚がもうねーんだわ！仮に傷の手当てが出来ても魔力もスツカラカンでこうして現界してるのはある意味奇跡なんだよなー」

「何を言ってる……嘘！あなた……身体がっ！」

手足から消えていく俺の身体を見た少女が驚いて声をあげる。

「な？だからお嬢ちゃんが気にしなくていいんだよ」

「でも……、なら名前を！あなたの名前を教えてください！」

「俺の名前を……？正気かお嬢ちゃん。俺の名前を聞いたなら呪われちゃっても知らねーぞ

「？」

ケケケと悪い笑みを浮かべて少女に伝えると、少女はそれにビビるどころかむしろ無言で強い眼差しを俺に向けてくる。

「……………ハア。俺の名前……………ねえ？」

まあ、どうせリトライしたらなかつた事になるんだから別に教えてもいいか)

「いいけど、まず先にお嬢ちゃんの名前を教えてくださいねーか？人の名前を聞くのは自分から……………だろ？」

何度も助けたんだ、これくらいの役得はいいだろ？

少女の強い瞳に負けた俺は先に少女の名前を教えてくださいと頼んだ。

「は、はい！私はセレナ・カデンツァヴァ・イヴです！あなたの名前はなんて言うのですか？」

「セレナ……………ね、いい名前だな。次は俺の番だな？俺の名前は、アン……………」

少女―セレナに名前を教えてもらい、セレナに俺の名前を伝えようと口を開いたが、気を抜いたせいか現界を維持するのを忘れてしまい名前を言う途中で俺の身体は霧散してしまい、俺の意識はそこで途切れた。

―了―

リトライ2：雑音VS残骸……なんてな？

―夢を観た。

―いいかい人間のお嬢さん。絶望にいるモノを救おうとするのなら、負の感情で動いてはいけないんだ―

それは覚えのない筈の記憶。

―愛だよ愛。それが基本にして最強だ。人間、強くなれるのは愛すればこそだって言わないか？―

自分の目の前に立つスーツを着たどこか見覚え見覚えがあるがない女に向けて言葉を向ける。

―そうだな。けど、もう大抵は見飽きちまったからなにか、新しい物のために、終わりでも、見てみないと―

スーツを着た知らない女に俺じゃない誰かが大げさに手を広げてから肩をすくめる。

—それでも、命には価値がある。悪を成すべき生き物でも。人間には価値が無くて、今まで積み上げてきた歴史には意味がある。いつまでも間違えたままでも—その手で何かが出来る以上、必ず救えるものがあるだろう—

記憶に残る女の質問に答える。

—誰かに認められたいって気持ちはな、誇つていい事なんだよ。その気持ちはあるヤツは、同じように、きつと誰かを認めてやれる—

自分の気持ちに怯えている堅物か弱いな女に自分の気持ちに誇つてもいいと伝える。

—……
—世界は続いている。瀕死寸前であろうが断末魔にのたうちまわろうが、今もこうして生きている。

それを—希望がないと、おまえは笑うのか？—

誰かの夢を観た——
記憶

—アンリマユ視点—

ざわざわ……

ざわざわ……

「あーもう、ウルセーなあ？人が寝生き返ってているのに騒いでんじゃねーよ」

消えた意識が浮かび上がるのと共に周囲から無数の人の声が俺の耳に入るのを感じ、まーたりトライかと思いつつ俺は閉じていた眼をパチリと開け、目の前の光景を観て驚きと疑問が同時に浮かび上がった。

「あん？森……じゃないな、なんだここは？つーか何この人の数？」

あの化け物を漸く倒して、いつも通り森の中からリトライをするのかと思つたらどこかのライブ会場の観客席の出入口の通路に立っていた。

何故いつもの森の中ではなく、こんな場所に立っていたのか疑問に思い腕を組んで考

えていると――

―ワアアアアアアアツツ！！！！―

「ウオツ?!なんだこの歓声は?」

突然沸き上がった歓声に驚き、出入口に近づき会場を見渡してみると、ライブ会場の
上から二人の女が舞い降りてきた。

どうやらこの歓声はあの二人が出てきたから沸き上がったのか。

(つーか、誰?)

おそらく有名な歌手だろう二人の女に目を向けると赤い髪の女が先に歌いだし次に
青い髪の女も歌い出した。

二人が歌い出すと合いの手を入れるように観客の歓声が大きくなり、歌っている二人
の歌も負けないように歌い続ける。

(へー、いいねー。あの二人を知らない俺でも心が踊りそうなくらい良い歌だ。やつぱ
いい女が歌うのはいいもんだな)

二人の歌をしばらく聴いているといつの間にか歌が終わり、次の曲が流れ始めた。

「しっかし、なーんで俺こんな所にいるんだ?」

あの化け物を倒した後いつも通り死んで森の中で目覚めると思ったら、いつの間にかここにいるし。もう願いは叶えたのか？」

歌を聴きながら疑問を浮かべているとライブの途中で突然警報が鳴り響いた。

（あ？なんだこの警報？）

突然鳴った警報に首を傾げているとライブ会場や観客席に半透明のナニカが何も無い空間から無数に現れた。

「の、ノイズだあああああつ!？」

—ウワアアアアアアツ!?!—

ナニカ共の姿を覗いていると突然ナニカが数人の観客達に触れて観客席に黒い粉にが舞った後、それを見た観客席にいた一人の叫び声を皮切りに観客席にいた人間達が一斉に出入口に殺到した。

勿論、出入口の前に立っていた俺の所にも観客達が押し寄せてきたがその場を跳躍して上の観客席に移動してやり過ごした。しばらくしてから周りがいなくなり、俺は観客の一人が言った言葉を口にした。

（ノイズ……それがあのナニカ共の名前なのか？さっきの光景とあの慌てようから察す

るにスゲーヤバイ存在ってのは解ったが、さーで、どうなるか……ん？)

この状況をどうなるのか考えていると先ほどまで歌っていた二人組が視界に入った。
「なんだアイツら？逃げ遅れたのか？っておおっ？」

「Croitzal ronzell Gungnir zizzl」

さつきまで歌っていた二人の内、赤い髪の女が突然走り出して唄いながらノイズというナニカに向かって行くのを見て驚いて声を上げていると赤い髪の女の身体が光った後、ピツチリスーツの鎧に変わり、さらに両腕を合わせると両腕に着けてある籠手が離れ一本の槍に変化した。

赤い髪の女は槍を持ってノイズ？に向かって槍を振り回したり、槍を上にごん投げ空中で分裂して地面に降り注いだ。(あれ、エクステラ版クーフリーンのゲイボルグか？)

—ペタペタ—

「あ？なんだあの槍？何故か悪寒が……？あの槍を見ると本能的に逃げたくなるんだけ

ど……ん？」

「Imyuteus amenohabakiri tron」

赤い髪の女が持つ槍に忌避感を感じていると赤い女と一緒にいた青い髪の女も歌を唄うと青い女も赤い女と似たピツチリスーツの鎧を纏い、両手に刀を持ってノイズを切り裂いて赤い女の側に寄り共にノイズ？の大群に攻撃を仕掛けた。

—ペタペタ—

「つーか、さつきからなんだコイツら？」

このまま姿が変わった女達の戦いを見続けたいが、いい加減、俺の周りに集まって俺の身体をペタペタと触ってくるノイズという奴らに目を向ける。

つてか、お前ら触りすぎ！しつこいわ！

カラフルな色合いで可愛い見た目で、ピコピコとしか言っていないのに何故かコイツらからは人間を殺すという意思が伝わってくるのが解るし……。

つーか、それ以前に……

「あーもう、ピコピコピコピコとウルセーよ！」

それにきア、さつきからお前らが俺の代わりに人間を殺してるのを見てイライラしてんだよ」

そうイラついている。

人間に対する復讐心はないが、奴らが人間を殺すのはいただけくない。

俺としては人間を殺害するのは本能であり、生體そのものである。

それをノイズというワケわからん奴らが人間を殺すのは俺自身の存在意義を否定するのと同じである。

——てなわけで。

「ちよつくら憂さ晴らしに付き合えやア！雑音共オ!!」

両手に呼び出した【右歯噛咬】と【左歯噛咬】を握りしめ、人型の雑音の顔を右手の【右歯噛咬】で突き刺し、黒い粉一匂いからして炭か？——になって崩れ落ちるのを待たずに次の雑音の首を【左歯噛咬】で断つ。

次に歯を剥き出しにして噛み付こうと飛びかかってきた雑音を【右歯噛咬】と【左歯噛咬】でソイツの歯ぐきに突き刺し、その勢いを利用して地面に叩きつける。

雑音に突き刺さったままの【右齒齧咬】と【左齒齧咬】を手放して新たに呼び出した

【右齒齧咬】と【左齒齧咬】で首が長い奴の首を胴体と別れさせた。
 「ハッハア! どうしたどうしたア! そんな遅い動きで俺を殺せると思っっているのかア
 !?」

その言葉で雑音共の攻撃が激しくなるが、俺はそれより速く牙を振るって抜け道を作りながら雑音共を炭に変えていく。

本来のアンリマユのスペックではこんな大群を相手取るのは無理だが、雑音共の動きが鈍いのと散々あの化け物と相手をした経験のおかげでなんとか立ち回る事が出来ている。

そうして雑音共を蹴散らしていき、ようやく包囲網を抜け出す事が出来た。

「よし、ようやく抜け出せたア! ……つたく、どうせ囲まれるんならあの二人みたいな女にしろってんだよ。

ああでも、赤い女はともかくあの青い女はもう少し胸があればいいんだよなア。

あの肉付きじや、あんま触り心地が悪そー……

— 蒼の一閃 —

「って、危なッ!？」

そう言っていると会場から観客席に向かって蒼い斬撃が放たれ、前にいた雑音共を切り裂きながら俺に向かってくる。

それに気付いた俺は咄嗟にその場を蹴り地面を転がって斬撃をギリギリかわす事が出来た。(腰に着けた布の端が少し切れたが)

「ど、どうした翼？いきなり蒼の一閃を放って？」

「ごめん奏。何故かわからないけど、あそこに向けて攻撃しなきゃいけないと思って……っ！」

「そ、そっか……まあ、結果的にあそこにいたノイズを倒せたからいいけどな」

という会話が会場の方から聞こえた。

「じ、地獄耳かよあの女……!？」

観客席
「ここからスゲー離れているのにどんだけ耳がいいんだよ……ッ!?!……ん？」

地面から起き上がりながら斬撃を放った青い女の聴覚の良さに驚いていると少女の悲鳴が聞こえた。

(悲鳴？あつちから聞こえたな?)

観客席の手すりまで近づいて悲鳴が聞こえた方を見下ろすと、先ほどの悲鳴の主であろう茶髪の少女が雑音に襲われてそうになっていた。

少女が雑音に殺されると思ったがその前に赤い女が槍を振るって雑音を切り裂いて少女に逃げろと叫んだ。

少女が離れたのを見て気が抜けたのか赤い女は雑音共が形を変えて突撃してくるのに気付くのが遅れて槍を回転させて攻撃を防ぐがしばらく耐えていると突然、赤い女の持つ槍が砕け、砕けた槍の破片が赤い女に言われて逃げていた少女の胸に突き刺さり少女が後ろに倒れた。

倒れた少女に叫びながら駆け寄ってきた赤い女が少女を抱き起こし生きるのを諦めるなど声をかける。

赤い女の声に反応したのかゆっくりと少女の目が開き、それを見た赤い女がよかつたと息を吐く。

(おいおい…安心するのはまだはえーだろ。周り囲まれているぞ?どーする気だねーちゃん?)

チラリと視線を赤い女達から半円を描くように広がっているノイズの群れに向けると、赤い女が少女を崩れた瓦礫にもたれさせてゆっくりとノイズの群れに近づいていく。

「駄目！奏！絶唱を唄っては駄目——！！」

何をするのか見ていると赤い女から離れた場所でノイズを切り裂いた青い女が何をするのかわかったのかやめるように声を挙げる。

「絶唱って…確かセレナが唄ってたやつか？」

俺は青い女が言っていた聞き覚えがある言葉に首を傾けた。

それはリトライの数が三桁を越えた頃に化け物戦って瀕死になりかけた時に一度だけセレナが唄ったのを見たことがある。

たった一度だけだったが、魔力に似た力で当時倒せなかった化け物を無力化させ丸い玉に変えた唄。

……その代わり、セレナから大量の血が流れ地面に倒れてしまった。

——あの時のセレナの姿は俺の目に強く焼き付いている。

「……………ハア、しょうがねえなア。俺もまだまだ甘いねエ…」

俺はため息を吐いて手すりに足をかけると、足に魔力を流してから手すりを蹴って赤

い女の下に跳んでいった。

—アンリマユ視点、終了—

・ ・ ・

—奏視点—

「Gatradis babel ziggurat edenal Emusto
Irozen fine el baral zizzl—」

LiNKERが切れ、もう後がないと判断したあたしはノイズの大群から翼と少女を生かす為に自分の命を代償にして絶唱を唄い始めた。

「お願い奏！唄っては駄目——!!」

翼が離れた場所で辞めるように叫ぶけど、この場を切り抜けるにはこれしかないんだ。ごめんな翼。

「奏えー！ー！！」

翼にごめんと思いながら、絶唱を唄い終えようとしたその時――

――グワシツ――

――モミモミツ――

「……ええ？」

「おお、スゲエ！想像以上の揉み心地だわこれ！」

あたしの背後から現れた手があたしの胸を鷲掴みにして遠慮なく揉みしだかれた。

「ウワアアアアアアッ！」

「な、なんだあんた!?いきなり人の胸を揉んどいて!?こんな時に何を考えているんだ
!」

あたしは情けない悲鳴をあげながら手から離れた後、片腕で胸を隠して振り向くと同時に欠けたアームドギアを背後に突きつける。

振り向くとそこには額と腰に赤い布を巻いた褐色肌の全身入れ墨男が笑みを浮かべて立っていた。

「イヤー、そいつは失敬。目の前にピッチリスーツを着た巨乳の女がいたから、我慢出来

ずについ手を出しちまった。想像以上の揉み心地だったぜねーちゃん？

後、その槍突きつけないでくれる？ 悪寒が止まらないから」

「誰が揉んだ感想を言えつて言つ……グッ!？」

笑顔で親指を立てる入れ墨男に苛ついたあたしは入れ墨男に文句を言おうとした口を開いた瞬間、不発とはいえ絶唱のバックファイアが全身に走りあたしは耐えきれず地面に膝を着いてしまった。

「くそ、こんな時に……っ!？」

「まあまあ、そんな身体で無茶なさんなつて。ここは俺に任せてねーちゃんは少女の隣に座って休んでな？」

入れ墨男はあたしの頭をポンポンと叩いてからノイズの群れに近づいていき、その後、翼があたしに駆け寄って無事かと声をかける。

「お前……何、を……？」

「なーに、この世^悪全ての悪^神がたまには正義の味方の真似事^様をしたいと思つてね？ よーするにただの気まぐれだ」

あたしは翼に肩を借りて痛みに耐えながら、入れ墨男に声をかけると入れ墨男は笑いながらノイズの大部の前に立ち止まると右手を挙げて額に巻いている布に手をかける。

「さあさ、お立ち会い。お前らの前にいるのは【この世^最全ての悪^凶】の名を背負った紛^最い物^弱。

紛い物とはいえこの身は一応英霊なんだな……まあ、正直に言えば……

テメーらみたいなのせいで、いい女が死ぬのがムカつくんだよ！」

入れ墨男が額の布を投げ捨てると入れ墨男の身体が青……いや、蒼く光り輝いた。

真つ黒だった黒髪と入れ墨が光り輝く蒼に変わり、腰に巻いた赤い布は漆黒の色に染まっていた。

「なんだ……あれ？あの輝きはまるで……」

——星みたいだ——

——奏視点、終了——

——アンリマユ視点——

俺は雑音共を片付けるようと準備の為に額の布を投げ捨て、魔術回路を全て起動させる。
魔術回路を起動した影響か全身に走る刺青が蒼く光り輝き出したがそれを気にせず

ククワセロ
クイタイ

おーおー、外に出れるとわかった途端、涎垂らしてウズウズしてるよコイツら……。ま、しようがねえか。散タリトライ死に戻りを繰り返してたらいつの間にかこんなに増えまくったからな、そりやあ中も手狭になるし鬱憤も溜まるよな。

「さーて、待たせたなア……！…飯の時間だ獣共オ！目の前にあるのはテメーらの大量のエサだ！一片も残さず平らげなア!!」

その言葉の後に俺自身の身体を黒い獣怪物の姿に変わり、足下の影が盛り上がり始める。俺は獣の口をニヤリと笑い言霊呪いを言いはなつた。

「——無限アンリミテッド・レイズ・デッドの残骸オオオオオオツ!!——」

その言葉を言った直後、盛り上がった影が弾け飛び、俺の影から無数の黒い獣怪物が飛び出して目の前のノイズの群れに向かって牙を剥き出しにして襲いかかった。

獣の一体がノイズに飛びかかり牙を突き立てその身体を噛み千切る。

もう一体の獣が爪を振り回してノイズを切り刻んでいく。

もう一体の獣はノイズに身体を貫かれるが、獣はそれに構わず顎を開いてノイズの顔を噛み砕く。

複数の獣達が巨大なノイズの身体をよじ登ってその鋭い爪と牙を突き立てる。

他にも二体ばかりでノイズに襲いかかるのもいれば、逆に小型のノイズに身体を貫かれたり巨大なノイズに潰され身体が消滅する獣もいる。

けど残念、ソイツらは俺が出すのを辞めるか魔力がなくなるまで無限に沸き続ける残骸なんだよ。

コイツは本来ならアンリマユが持つ筈のないタイころアツパー限定の必殺宝具。何千回目のリトライを繰り返していたらどういうわけか使えるようになっていた。

(まあ、使えるようになったのは手札が少ない俺にとっては嬉しいことだけど、その代わりに魔力の消費が大きくなったのは辛いけどな……)

だから――

「俺の魔力がなくなるのが先か、お前らが喰い尽くされるのが先か我慢比べといこうぜッ!!」

—数十分後—

「あー……しんどい」

あの後、数分かけて大量にいたノイズの群れを残骸共が文字通り喰い尽くし、ノイズと獣がいなくなつてからやって来た作業服を着た男達が現れて瓦礫を撤去作業をしているのを横目で見ている。

俺はというと魔力が足りなく立つのも辛くなつてきたのでそのまま地面に仰向けに倒れていた。

（あーしつかし、ギリギリだったな……。アイツらの数が少しでも多かつたらこっちの魔力が切れて逆に殺されるところだった……）

本当、運が良かったな……うん（幸運Eだけど）

「お、おい……大丈夫かあんた？」

「お？」

さっきの赤い女が青い女に肩を借りて俺の近く寄つてきて声をかけてきた。

「おー、ねーちゃん。お互いなんとか無事に生き残つたな？」

「無事って……あたしはともかくあんたは満身創痍じゃないか」

「ハツハツハツ！確かにそうだな！」

まーいいじゃねーの？死んでさえなければ無事ってことでいいんだよ」

何度もリトライを繰り返している俺にとつちや無事に入るんだよ。

「あーそうかい。まあ、助けてくれたあんたに礼を言いたいところだけど……あんたには色々言いたい事があるだよな……」

「それにノイズを殲滅したあの黒い獣達と力について詳しく聞かせて欲しいとあなたを特異災害対策機動部二課にまで来て欲しいと叔父様から言われています。

あなたの保護も兼ねてますのでどうか私達に付いてきてください」

……そりゃあんなのを見たら、普通にそうなるよなー。

まあ、魔力が不足してるから逃げられないし、魔力が回復するまではとりあえずコイツらのところで大人しく付いていくか。

それに――

―チラリ―と目線を赤い女に向ける。

「ん？」

……ま、今は目の前の女を助ける事が出来たから別にいいかな。

—アンリマユ視点、終了—

リトライ3：嘘は言つてねーよ？嘘は

——特異災害対策機動部二課、取調室——

——弦十郎視点——

「藤堯。彼の聴取で何かわかったか？」

ライヴ会場に現れた謎の青年が、ノイズを殲滅してから1日が経った朝。了子君と共に事情聴取をしようと身柄を保護した青年から事情聴取をしていた藤堯を一度呼び出し、青年についてわかった事がないか聞いてみたが……。

「それが全然ですよ。何を聞いても出鱈目にしか聞こえないし、ようやく聞き出した名前は偽名にしか見えません。それを指摘したら、『言つてもいいけど……呪われても知らねーぞ？ケケツ』と笑つてましたよ……」

「呪いねえ……まるで自分が悪霊みたいな言い方ね？」

「朝からすまなかつたな、藤堯。少し休んでくれ。次は俺が聞こう」

「すみません……お願いします」

それを聞いて、藤堯から聴取した内容を記した資料を渡された後、藤堯に休むよう伝えてから子君を連れて取調室に入る。

「お？次はあんたらが話し相手か？朝から取り調べに協力してやってんだから、いい加減飯の一つや二つ出してくれねーのかよ？」

「朝から君を拘束したのはこちらが悪かった。俺は風鳴弦十郎。隣の女性は……」
「櫻井了子よ。よろしくね？」

「繰り返して悪いが、もう一度こちらの質問に答えてくれるか？」

「また聞くのか？ま、別にいいけど……俺が答えられる範囲内ならな」
「すまん。終わったら腹一杯食わしてやるからな」

「お、マジで！」

部屋に入った俺の顔を見た青年は、昨日から椅子に座って、両手を手錠で縛られているというのに未だに余裕の態度を崩さず、笑いながら軽口をはいた。

俺は軽く謝罪してから、取調室にある机と三つある椅子の内、空いている椅子に座り、その隣の空いている椅子に子君が座ってから、青年に藤堯が資料に書き記した内容を質問した。

「君の名前は？」

「アヴェンジャー。……まあ、わかると思うが偽名だけど、自分で付けたんじゃないぜ？」

ま、偽名でも俺が俺である証だ」

(……やはり偽名か。それに今の言葉、誰かにまるで与えられたような言い方だな?)

青年——アヴェンジャーが言った言葉に疑問を感じつつ、次の質問をした。

「何故あの場所にいた？」

「知らね。気付いたらその通路に立っていたし……寧ろ俺が知りてーよ」

「気付いたら……か。では、その前にいた。場所は覚えてるか？」

「さあ？最初に目覚めたのはどっかの森の中で、最後にいたのはどっかの研究所の中だったな」

(ライヴ会場の周辺に彼の言う研究所や森はない。だが、彼が嘘を言ってるようには見えない。どういう事だ?)

アヴェンジャーが嘘をついてないか考え、その間に了子君が気になっていた質問を彼に聞いてみた。

「今度は私から聞くわ。あの時、シンフォギアとは違うノイズを倒した力はなんなのか教えてくれない？」

「なんだと言つてもな……あれは俺の【宝具】の一つとしか言えねーな。それに何であのノイズつー奴らに効いたのか、俺が知りてーよ」

(【宝具】……それがノイズを倒した力なのか?)

「その宝具とは一体なんなのか教えてくれないかしら？」

「ソー……宝具ってのは、色々種類があるが、俺達「英霊」を象徴する武具や道具であり、切り札にもなる——まあ、簡単に言えば必殺技だな」

（【英霊】……また知らない単語が出たな）

「その英霊というのはどういう存在？それにその言い方だとあなたもその英霊なの？」

「アー、それも説明しなきゃいけないのかよ、メンドクセー……」

アヴェンジャーが椅子の背もたれに体重を乗せて、顔を上に向け気だるい声を出した後、視線だけをこちらに向けて、そのままの姿勢で説明の続きをした。

「……英霊ってのは分かりやすく言えば、生前に活躍をした英雄が死後に人間を超えた存在に昇格した魂が呼ばれる呼称だ。それで、ソイツらが生前に使っていた武具や道具がさつき言った宝具って訳よ」

「フーン、なるほどねえ……それならあなたも生前に活躍をした英雄の一人なわけ？」

アヴェンジャーの説明を聞いた了子君は、彼にそう質問すると、アヴェンジャーは突然腹を抱えて笑いだした。

「……ぷつ、ギャーハッハッハッハッハッ!!おいおいオバサン、俺がそんな真つ当な英霊にみえるのかよ？んなわけねーだろバーカ！ヒーツ、腹イテー!!」

「オバ……ッ!?!」

突然笑いだした彼の姿に俺は驚き、了子君は彼に言った単語を聞いて硬直した。しばらく笑っていたアヴェンジャーは呼吸を落ち着かせた。

「ハツハツハツハツハツ……ハアーツ、ワリーな、ちよつとおかしな事を聞かれてつい笑つちまつたよ」

「いや、別に構わない。だが、自分が真つ当な英霊ではないというのはどういう事だ？」
未だに硬直から戻らない了子君の代わりに答え、アヴェンジャーに質問をした。

「ああ、それはな——英雄には二つの種類がある。一つは生前の偉業が称えられ英霊となった一般的な英雄で、もう一つは、世間から悪と認識されながらも結果としてそれが人々の救いとなったもの、自らを強大な悪として有象無象の小さな悪を打ち消すもの、本人の意思とは裏腹に周囲が救い手と祭り上げたもの、このいずれかに該当するのが反英霊と言われんだよ。……んで、俺はその後者にあたるから、真つ当な英霊ではないんだよ」

「反英霊……か」

俺は卑屈な表情で説明する彼の顔を見る。先ほど自身を真つ当な英霊ではないと言ったが、俺はそうは見えなかった。

昨日の奏達を助けた彼は、端から見れば英雄と言われてもおかしくはない行動を起こしてくれた。自身を否定しても、君は彼女達からして見れば、英雄だよアヴェンジャー。

——数十分後——

それから、硬直から戻った了子君がアヴェンジャーの首を締め上げる等の一悶着があつたが、無事に取り調べご終わり、気持ちが悪く着いた了子君が話の内容を手元の資料に纏めてある間に彼の手錠を外すと、アヴェンジャーは手首を交互に擦りながら愚痴をこぼす。

「アー……：……ようやく終わったー。ったく、ワリー事してねーのに拘束されるとはなー」
「それはすまなかつた。だが、一応君が何者なのか知るためにやった事だ。規則とはいえ、気分を害してしまつたのなら、いくらでも頭を下げるつもりだ」

「いや、別にそこまで言っただけよ？まあ、昨日から何も食べてねーから、それだけが不満ぢや不満だな。これが終わつたら腹一杯食わしてくれんどうなオツサン？」

「ああ、言葉通り腹一杯に食わしてやるから、安心して食ってくれ」

「おう、そいつは楽しみだな！」

そう言ったアヴェンジャーは子供のような笑顔をこちらに向けてくれた。それを見た俺は彼を二課の食堂に案内しようと部屋から出ようとしたが――

「ちよつと待って」

――了子君に呼び止められた。

「ごめんねー、ご飯の前にあなたの身体を調べさせてもらえないかしら？ 昨日のドタバタで調べる暇がなかったの。大丈夫、すぐに終わる予定だから、ご飯を食べる時間には間に合うから、ね？」

「む、確かにそれもそうだな。すまないアヴェンジャー、という訳だが協力してくれるか？」

「身体を調べるだけだろ？ すぐに終わるんなら、別に構わねーよ。それじゃさっさと終わらせてくれよ、オバサン」

「(ビキツ) ……ええ、協力ありがとね、アヴェンジャー君。じゃあ早速検査をしましょうか。悪いけど弦十郎君、終わったら連絡するから、それまで待っててね？」

こちらに笑顔を向けた了子君の顔を見た俺は、その威圧感に圧され、思わずしり込みしてしまう。

「あ、ああ………わかった。その、ほどほどにな」

「フフ………善処するわ」 ガツ

【青年についての報告書】

- ・ 名前：アヴェンジャー
- ・ 出身：中東、又は日本？
- ・ 年齢：17〜20代前半？
- ・ 家族構成：不明

突然、ライヴ会場に現れた動く入れ墨を全身に施した謎の青年。大量のノイズの群れを殲滅する力を持つていたため、【特異災害対策機動部二課】の下に身柄を保護する。

その正体は、生前に活躍をした【英雄】の魂が昇格した【英霊】と呼ばれる存在で、彼の場合、人々から悪と認識されながらも結果としてそれが救いとなった【反英霊】と呼ばれる存在らしい。

次にノイズを殲滅した力は【宝具】と呼ばれており、アヴェンジャー曰く、英霊を象徴する武具や道具をさす、英霊にとって切り札である。彼は、その宝具を使い、ノイズの群れを殲滅させた。

また、説明の途中で彼はノイズに触れたが、炭素分解せず、更にノイズが纏う位相差障壁を無視して、ノイズを倒したと発言した。

その後、櫻井了子がアヴェンジャーの身体を検査をした結果——彼の身体から、微弱

ながらもフォニックゲインの反応が出ていた事が判明した。

何故、シンフォギア装者でもない彼からフォニックゲインの反応がしたのか、調べているとアヴェンジャーの全身に施した、動く入れ墨自体が宝具であるとアヴェンジャー自身の口から教えてもらった。

アヴェンジャーに質問するも、彼自身も名前を知らない宝具であり、現代にある悪の概念によって、入れ墨の形が変わるだけの宝具であり、どうしてフォニックゲインが出ているのかは解らないとのこと。

他に彼が出した、歪な二本の短剣からフォニックゲインが検出されたがその二本の短剣も彼の宝具であり、こちらもどうして出ているのかは解明されていない。

検査の結果、彼は生きた完全聖遺物であると判断された。

検査の後、彼の身柄を海底に建造された「深淵の竜宮」に収めるべきか上層部と議論したが、単体でノイズと殲滅する能力を活かすべきと反対の意見も出て、更に生体完全聖遺物という存在であるので、「深淵の竜宮」に保管されている他の聖遺物に影響が出る可能性があるため、「特異災害対策機動部二課」に身柄を預ける事にする事が決定された。



リトライ4：ガングニールって、増えるのか？

——アンリマユ視点——

よう、お前ら久しぶり。

あのライブ会場から二課に保護された俺は、取り調べと検査をした後、オッサンから、なんて言ったっけ？特異………なんたら二課に協力してくれないかと誘われた。

最初は面倒だから断ろうとしたけど、マスターもなく、魔力が不足してそれを補う食料を買う金もなく、しかも何の後ろだてがない状態で既に詰んでいる状況に気付き、冷静に考えた結果、オッサンに協力すると伝え、俺は二課の協力者になった。

んで、俺が助けた後入院していた二人の女、天羽奏と風鳴翼との顔合わせをしたり、オバ：子子さんによる検査を称した実験を受けたり（ぜってーオバサン呼ばわりした事をまだ怒っているだろあのオバサン）。

他にも、ノイズとの戦闘で殺リトライしてされて、オッサンの特訓に死にかけたり（人間じゃねーよあのオッサン）、奏達のトレーニンングに付き合ったり（ハプニング期待したけど、そんなのはなかった）、ノイズに殺されたり、オッサンの特訓に死にかけたり、ノイズに殺さ

れたり、殺されたり、殺されたりとリトライの繰り返し……。

あれ？死んでばかりじゃね俺？

まあ、それからあつという間に二年の時が経ち、二課の休憩スペースでだらけてたら、ノイズが出現したアラートが二課内に響き渡った。

司令室に向かうと先に来ていた装者の二人から声をかけられた。

「遅いぞアヴェンジャー。なにしてたんだ？」

「ワリーワリー、チョイと昼寝してたわ」

先に声をかけてきたのは、俺が助ける要因になった女は天羽奏。

元からいい女だったのに、この二年間で更にもっといい女になったなこいつ。ちなみに自己紹介の時に、俺に胸を触られた事を言われ殴られた。

「まったく、そんな態度ではいざという時に動けなくなったらどうする気？それでも防人なのアヴェンジャー？」

「いや、俺、防人じゃなくて英霊だし、お前と一緒にするなよ翼」

次に声をかけてきたのは、二年間で知らん内に変な言葉を使うようになった絶壁娘——ギロツ——……もとい、防人の風鳴翼。

てか、ちゃんと飯食っているのかこいつ？二年前と変わってねーぞ？（どこがとは言わない）

その後、ノイズの反応とは別の反応——「アウフヴァツヘン波形」が検出され、その波形パターンを照会してみると——

「『GUNGNIER』」

「ガングニール…だとっ!？」

奏の持つガングニールの反応が出た。

俺はチラリと横にいる二人の顔を見てみると、翼は信じられないと一度奏の顔を見てから再びモニターに顔を向ける。

一方の奏はというと、自分の首に掛けてあるガングニールのペンダントを握りしめ、それがあつたのを確認して再びモニターに顔を向ける。

んで、奏と翼が現場に向かつてみると、奏と似たギアを纏った少女が幼女を抱えてノイズから逃げ回っていた。(俺は前日に現れたノイズとの戦闘で負傷していた為、二課で待機してた)

……ガングニールって、某騎士王と同じように増えるものだけ？

と、俺がアホな事を考えている間に奏と翼がノイズの群れを殲滅した。

——前々から思っていたけど、俺ここにいる意味あるのか？あんなだけの戦闘力があるなら、俺いらねーだろ？

……………自分で言っておいて、傷ついたわ。

「なんでえーっつ?!」

お？なんか知らん間に少女が手錠掛けられて車に乗せられた。

多分、二課ここに連れて行かれてるんだろ？頑張れ少女よ。

ん、どうしたオツサン？さっきの少女の出迎えの準備をするって？……………何それ面白そう。

なんなら、そいつの記憶に残るようなもんをやってやろうじゃねーか！

オツサンからの提案を聞いた俺は、早速イタズラパーティーの準備を始めた。

さーて、まずは去年の冬に奏を驚かせたこの【ギョロ目ジル君人形】をよーいして、次に翼をビビらせた【SAN値直葬ラフムマスク】を被って、入ってきた瞬間にこの【海魔型クラッカー】（紐を引いたら、沢山の海魔の形の紙吹雪が出てくるやつ）引いて驚かせてやるか。ニヒヒヒッ

※トラウマになります。

ちなみに、少女の背後から霊体化を解いて、それらを全部やった結果少女はガチ泣きして、俺はオッサン達にやり過ぎだと殴られた。

——了——

リトライ5：うっわ、エツツツツツ！

——アンリマユ視点——

ガングニールの少女——立花響を二課で保護をしてオツサン達から殴られた翌日、まだ痛む頬を擦りながら俺は今——

——オレの隣で離れて歩く立花響の姿を眺めていた。

なんでそうなったのかと言うと、嬢ちゃんの検査結果の後、ノイズの反応が二ヶ所に現れて二課から遠い方をオレと奏が、近い方を翼が対応しに向かったんだが：翼の向かった場所のノイズの数が俺達の方より多かった。それを聞いた奏が翼に無理をするなど言っつてノイズを倒していると、二課にいた嬢ちゃんがギアを纏って翼の援護に向かった。

嬢ちゃんと共にノイズを倒した翼は、「まだ未熟ですけど、この力で困っている人達を助けたいんです！だから、一緒に戦ってください」と嬢ちゃんが言った言葉を聞いた翼

は、「……………そうね、戦いましょうか」と言つて嬢ちゃんに斬りかかった。

まあ、寸でのところでオッサンが現場に現れて、翼が繰り出した、「天の逆鱗」を受け止めた。……………拳一つで。

……………いや、ちよつとまで、マジで人間なのかあのオッサン? 後で詳細を聞いたけどはっけいで衝撃を地面に受け流して、被害が碎けた道路とオッサンの靴つてどんだけだよ!?! しかも他の奴らも驚かず平然と流しているし……………あのオッサン本当に人間か?

——まあ、それは置いといて
閑話休題——

二課に戻った、嬢ちゃんに刃を向けた翼をオッサンと奏がどうしてこんなことしたのか説教を兼ねて話を聞いている間にオレは嬢ちゃんを寮に送りながら話を聞いていた。(ちなみにいつもの格好ではなく、赤いバンダナを巻いたまま、緒川さん達が着ている黒いスーツを纏っている)

「要するに、嬢ちゃんは自分の胸に宿ったシンフォギアの力で困っている人間達を助けたいっ?」

「は、はいそうです!」

んー、ちよつと警戒されてるな。まあ、昨日あんな事をしたらそうなるのは当たり前だな、うん。(反省はしないけど)

(つーか、この嬢ちゃん。なーんか誰かに似てるなと思つたら、この殻殻の元元になつた男男と少し似ているからだ)

勿論、見た目ではなくその精神中身が、だ。

片や二年前にノイズの被害に遭い、死にかけて奏に助けられた少女。

片や黒き聖杯の泥によつて全てを失い、死にかけて衛宮切継義父に助けられた少年。

後者は死ぬ寸前に呟いた「正義の味方になりたかつたんだ」という言葉から自身の身を省みない行動をするようになった。目の前の少女の行動にはあの男とどこことなく通点を感じる。

どこの世界にでもいるんだな、あの男と似た感性を持つ人間って……………ん？

(ちよつとまで、俺は今何を考えてた？俺はこの姿になる前は普通の人間だつた筈なのに、まるで実際に体験したようなこの記憶は？……………どういう事だ？)

「あのー、アヴェンジャー……………さん？」

つと、いけねーいけねー、今は嬢ちゃんと話をしていたな。

「あー、嬢ちゃんさあ……………ちよつと勘違いしてないか？」

「え？」

「嬢ちゃんはその力でノイズから人間達を助けたいと言って、その後翼に斬りかかられたんだよな?」

「はい……」

（おーおー、落ち込んでんなー）

オレは翼が思っていた心情を予想しながら、嬢ちゃんにどうしてそうなったのか説明をした。

「これはオレの予想だけど、多分翼は嬢ちゃんを戦いから遠ざけようとしたんじゃないか?」

「翼さんが、私を……?」

「そ、あいつは奏に助けられた嬢ちゃんが、自分の意思で戦場に立つて欲しくないと想い、嬢ちゃんを戦いから遠ざけようとわざと斬りかかったと思うんだ。」

変な口調をして不器用な女だが、根つこの部分は泣き虫の優しい女だ。恐らく嬢ちゃんをどうやって戦いから遠ざけようと考えた結果があれになったんだな。全く、

■と同じ不器用な女だなあ……ん?

(……さて、俺は今なんて言った? ■■■って言ったよな? んん!?)

なんだこれ? 頭ではそいつがどんな奴なのか知っているのに、なんでそいつの名前を口に出したり、頭に思い浮かべられねーんだ?

オレが疑問を浮かべていると、オレの言葉を聞いて考えていた嬢ちゃんか声をかけてきた。

「……アヴェンジャーさん！」

「うおっ!? な、なんだ？」

「翼さんは私の為を思つてあんな行動をしたのに、私は翼さんの気持ちを無視して自分の都合ばかり考えていました。だから、改めて翼さんの気持ちを考えて翼さんと奏さんにもう一度私の気持ちを伝えます！」

「お、おう……そうか、まあ、ガンバレよ」

「はい！ あ、寮に着いたんで私はこれで！ 見送りありがとうございました！ それじゃ！」

「ああ、じゃあなー。……さて、帰りますか」

さつきまでの落ち込みっぷりはどこに行ったのか、元気になって寮に向かって行く嬢ちゃんを見送ったオレは、ネクタイを緩めながら二課に戻ろうと踵を返した。

．．．

— 数日後 —

あの後、嬢ちゃんは翼と奏に自分の気持ちを改めて伝えると、翼も反省したのか嬢ちゃんの気持ちに向き合って自分の気持ちを剣ではなく、言葉として嬢ちゃんに伝えて謝り、二人のわだかまり問題はとりあえず解決した。

それからオレ達四人は度々現れるノイズを倒してから数日が過ぎたある日の夕方、ノイズの反応が地下鉄の駅に現れた。

翼と奏が現場に到着するのが遅れている間、俺は先に向かった響の援護をしようと現場に到着すると——

「——なんだ、あれは?」

現場に到着したオレは、目の前の光景に眼を疑った。それは首から上が黒く染まり赤い瞳をした嬢ちゃんが、いつもの嬢ちゃんとは思えない荒々しい動きで、ノイズを次々と倒していく姿だった。

「おいおい……なにしてんだよ嬢ちゃん。その姿まるで——」

—— 獣みてーじゃねーか。

「ガアアアアアッ!!」

「つて、んなこと言ってる場合じゃねーな。おい、嬢ちゃん、気をしっかり持て! そんなんじゃ怪我するぞ!」

オレは両手に実体化させた【右^ザ歯^リ噛^チ咬^エ】と【左^{タル}歯^ル噛^ウ咬^イ】を握りしめ、嬢ちゃんの周りにはいるノイズを片っ端から斬り裂きながら、嬢ちゃんに声をかける。だが、オレの音が聞こえなかったのか、嬢ちゃんはそのまま次のノイズに襲いかかり、また次のノイズに襲いかかった。

オレは舌打ちをして、目の前のノイズの首を斬り飛ばしもう一度嬢ちゃんに声をかけるが、嬢ちゃんはそのまま階段を下りて、地下鉄のホームにいたブドウみたいなノイズに向かって拳を握り締めた。

だが、ブドウ型ノイズ（以下：ブドウノイズ）は自身の頭? に実っているブドウみたいな実をこちらに向けて放つと、放たれた実は地面に触れると爆発が起こり俺達がいる空間が煙に包まれる。

「チイツ! おい、嬢ちゃん! 無事か!」

「あ、アヴェンジャーさん……あ、待ちなさい!」

「おい、一人で突っ走るな!」

先ほどの爆発で正気を取り戻した嬢ちゃんは、一度オレの方を見るが、ブドウノイズが線路に下りてこの場から離れようとする姿を見てオレを置いて、急いで跡を追いかけて、オレも線路を下りるがブドウノイズはブドウ型爆弾を天井に向けて放ち、爆弾が爆発すると天井が崩れ落ち一度辺りが煙に包まれるがすぐに煙が晴れ、ブドウノイズの姿を探すとブドウノイズは猿みたいな動きで空いた天井を登り上がり地上に出てしまつた。

「流れ……星?」

嬢ちゃんははすぐに跡を追おうと穴が空いた天井を見上げていると空いた天井から見える夜空に一筋の流星が射し込んだ。

オレは地上に出る為にと天井を登ろうと四苦八苦してる間に嬢ちゃんは地面を力強く蹴り、登っているオレをアツサリと追い抜いて地上に出て行った。

(クソ、自分のステータスの低さが嫌になるわ)

自分のステータスに文句言いつつ、オレは時間をかけてなんとか地上に這い出ると、そこには先に地上に出た嬢ちゃんと、いつの間にか来ていた翼と奏が、暗闇から月明かりに照らされて現れた白い鎧を纏った少女と対峙していた。どうやら、既にノイズは翼達が倒してくれたようだが、オレはそんなことより目の前の白い鎧を纏った少女を見

て、頭に浮かんだ言葉を大声で口にした。

「うっわ、スツツツッゲー格好！痴女かよあの女！」

「んなっ!?!誰が痴女だあああああつ！」

「グハアツ!？」

オレの言葉を聞いた白い鎧の少女が顔を真っ赤にさせて、両手に持った刺々しい鞭をオレに向けて振るい、オレは避ける暇もなく直撃を喰らい、夜空を弧を描くように大きく吹き飛んでいった。

リトライ6：あ、あれはもしやエクスカリバア"ア"ア"ア"
"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ッ!?!?! (光に吞まれた)

——アンリマユ視点——

よう、アンリマユになった元人間だ。

オレがああ痴女い鎧を纏った少女に吹っ飛ばされて地面に頭からめり込んで気絶している間に大変な事が起きた。(はいそこ、役立たずって言うな)

オレが気絶している間に奏が鎧の少女と戦い負傷、響は首が長いノイズに拘束され、翼は二人を助ける打開策に絶唱を唄い、鎧の少女は撤退、翼は絶唱のバックファイアにより重症を負った。

幸いにも現場に到着したオッサンとオバ——了さんが応急措置をしたおかげで命は取り留めたが、絶唱の影響でしばらくは戦線に復帰は出来ず入院。奏も翼と比べればまだマシなほうだが、全身打撲や打ち身、更に右肩が脱臼仕掛けたほどの怪我を負っていた為、同じく入院する事になった。

そして嬢ちゃんこと立花響はと言うと——。

「ハッ！テリヤッ！」

「そうじゃない！電を喰らい、雷を握り潰すように打つんだ！」

何故かオツサンに弟子入りをして特訓していた。

「言ってる事わかりません。でも、やってみます！でええええりやあああああつ！」

—ズドンツ！！—

（うっわあ……ギアを纏わずにサンドバッグを殴り飛ばしたよアイツ。スゲーなおい）

どうしてそうなったのかというと、あの戦いから自分の力のなさを悲観した嬢ちゃんは足手まといを脱却しようと以前見た人間離れの力を持ったオツサンの下に行き、オツサンに弟子入りをしたらしい。

そこから数日間学校を休んでまでオツサンの家で特訓した嬢ちゃんは、最初の頃からは想像がつかないほどに成長をして、今ではオツサンの特訓に付いていけるようになった。

「よしそこまでだ。最後はアヴェンジャーとの組み手だ！アヴェンジャー出番だ。響君と手合わせしてくれ」

「はい！わかりました！アヴェンジャーさん、よろしくお願いしますー！」

「ハイハイ、お手柔らかななあー」

オツサンに呼ばれ、座っていた縁側から立ち上がり、嬢ちゃんから5mほど離れた場所まで歩いた後、嬢ちゃんが立つ方を向いて両腕を力なく垂らし、猫背の姿勢で対する。

「それでは……………始め！」

「行きますー！ハアアアッ！」

「……………って、組み手なのに全力かよ!?!」

うーん、なんかアンリマユレと関わる女ってどうしてこう癖があるんだ？これも元になった少年殿の女難がオレに継承されてんのかね？（だとしたら、嬉しくねえなチクシヨウ）

ちなみに、なんでオレが特訓に付き合っているのか簡単に説明すると…………。

二課で暇をもて余していたら、訓練室でアクション映画みたいな動きの特訓をしていたこの二人を目撃してしまい、すぐさま回れ右をしてその場を去ろうとしたがオレに気付いたオツサンにあっさりと捕まり、そのままオツサン達の特訓に巻き込まれた。

とまあ、そんな訳でオレは嬢ちゃんの特訓に付き合っている訳。ハ―、やってらね。

・ ・ ・

——特異災害対策機動部二課、休憩室——

「いや〜！朝からハード過ぎですよ〜」

「ハツハツハツ！頼んだぞ明日のチャンピオン」

「ゼー…ハ―…ゼー…ハ―…！オツサンの家から本部^{ここ}まで走つたのに…：息を切らせないとは…：本当に人間かよお前ら…：…ッ！」

長距離を走つて疲労困憊になった身体を床に倒れ込んだオレは、倒れた状態のまま顔を上げて休憩室に備え付けてあるソファ^アに座り込んで大きな声を出す嬢ちゃんとオツサンに視線を向ける。

いや、マジでどうなってるの？普通あの長距離を走つておいて疲れたの一言で済むの

か？

「あ、あの自分から言っておいてなんでですけど、何もうら若き女子高生に頼まなくてもノイズと戦う方法とかないのですか？ほら、アヴェンジャーさんだつて弱いけどノイズと戦っているし？」

「さらつとオレを自然にデイスるのやめてくんない？え、なに？まだあの時の事恨んでいるの？」

（つーか、うら若き女子高生って（笑）……長距離を走って息を切らせてない時点であら若きつて言葉はないんじゃないかね？）

オレが嬢ちゃんという言葉に疑問を浮かべている間にオツサンが嬢ちゃんの問題に答えているのを横目にオレは身体を霊体化してある場所に向かおうとこの場をコツソリと離れた。

あ、ちなみに組み手の結果はというと……柔らかな感触の後、顔を真っ赤にした嬢ちゃんの踵落として地面に叩き付けられた。（役得役得）

——二課医療施設、天羽奏の個人病室——

二課から移動したオレが到着した場所は以前の戦闘で重症を負った翼と奏が入院している二課直轄の医療施設。

表向きは総合病院の体裁を取っており、私立リディアン音楽院高等科に隣接している。

戦闘で傷ついたシンフオギア装者を治療する以外にも、ノイズによる負傷者や死亡者についてのデータを収集している研究機関としての側面も持つ。とオバサンから教えてもらったわけだ。

(情報を収集ってなーんか裏がありそうだな?)

とまあ、考えるのは置いといて、オレは奏がいる病室の扉を開けると同時にベッドにいる奏に声をかける。

「オース、奏。最弱がからかいに来てやったぞー！」

「そこは見舞いにきたとか言えないのか、お前は？」

「意外と元気そうだな？ほれ、とりあえずオタクが好きそうな物を買ってきたぜ」
病室に入るとベッドの角度を上げて、身体を起こしてジト目をこちらに向けて返事をした。

オレは病院の購買で買ってきた見舞いの品を渡しながら彼女の身体に目線を配る。
額には包帯を巻き、患者衣の下には打ち身や打撲の痕が未だに残っていて、脱臼を仕掛けた右肩は動かさないように右腕を三角巾で吊っている。

オレが気絶している間にコイツはこんな状態になるまで戦っていたのかと思うと気絶していた自分に苛立ちを感じ、奏から見えないように拳を握りしめる。

「緒川さんから聞いたぞ？最近、響と一緒に旦那の特訓を頑張ってたんだろ？」

「まーな。オレはともかくあの嬢ちゃんは最初の頃と比べるとメキメキ上達してるのは確かだ」

「そっか、あたし達がいけない間にあいつも強くなってるのか……ははっ、安心したような寂しいような変な感じだな」

「……別にいいんじゃない？人間は成長する生き物だ。お前も翼も最初は最弱の状態から鍛えて今の状態になるまで強くなったんだろ？嬢ちゃんもいつまでも未熟なままでいる訳じゃねーよ」

「……………」

そう言つて苦笑しながら左指で頬をかいている奏に伝えると、奏は変な物を見たような表情を浮かべてオレの顔を見てきた。

「な、なんだよ?」

「お前つてさ、たまーにすごい事を言うよな?それを聞いていると本当に過去の英雄なんだな?」

「……………英雄つてーか、その正反対の存在なんだけどな」

「なんか言つたか?」

「うんやなにも?ところで翼はまだ集中治療室の中か?」

オレは誤魔化すように話をまだ集中治療室で眠っている翼について質問してみた。

「ああ、意識が戻ったけど、二課の医者の話だと絶唱のダメージがまだ抜けてないから、もうしばらくしたら向こうから出られるらしいぞ」

「そうかい、ソレを聞いて安心したわ。しっかし…………」

「な、なんだよ?」

「いやー」

それを聞きながらオレは目線を奏の身体をじつと見る。奏はそれに反応して身をよじりながら質問する。

「オタクが患者衣を着ている姿を見ると…………エロく見えるなあつて、ーガンツ!ーグ

ハッ!?

「い、いきなり何を言ってるんだよお前はっ!?!」

オレの言葉を聞いた奏は顔を真っ赤にして手元にあつた目覚まし時計をオレの顔面に投げつけてきた。

やっぱ、姉御肌の女が初な反応を見るのは最高だな!

・ ・ ・

そして、次の日。

「ヴヴヴ……ガアアアアアアアアアアツ!!」

「あ、あれはもしや!かの有名なエクスカリパーカット!!——ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ッ!?!?!」

とある任務の中、嬢ちゃんが手にした黄金の剣を見て驚いている間に、こちらを向いた嬢ちゃんが黄金の剣を振り抜くと剣から極大の光が溢れ、オレの身体は光の奔流に呑

み込まれオレの意識はそこで途切れた。

——アンリマユ視点、終了——

リトライ7：ムリゲー再び……

——アンリマユ視点——

——カッ！——

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

デュランダルつつー完全聖遺物を掴み黒く染まった嬢ちゃん放った
極大の光の斬撃を真正面から喰らった自身の身体が消滅するのを感じながら、オレはど
うしてこうなった理由を振り返っていた。

・ ・ ・

【完全聖遺物デュランダル】を二課から永田町への移送任務をする事になったオレと

嬢ちゃんはオバサンが運転する車にデュランダルを載せ、四台の護衛の車と共に移動していた。

しばらくすると高速道路の一部が崩れ、護衛の車が脱落したのを皮切りに一台、また一台と護衛の車が脱落していき、ついにはオバサンが運転する車だけになった。

オレ達はオツサンの指示で公共の道路から工場地帯に移動して撒こうとしたがオバサンの車が横転してしまい、車から這い出てノイズを迎撃する事になった。

迎撃する直前、オバサンの手からバリアを出した体勢を整えたオレ達は、ギアを纏った嬢ちゃんと共にノイズ迎え討った。

嬢ちゃんが次々とノイズを倒していくと前に会ったあの痴女い格好をした少女が現れた。

「今度こそお前を連れて——」

「あつ、あの時の痴少女！」

——つて、誰が痴少女だっ!!」

—バキイッ!—

「グヘッ!」

顔を真っ赤にしながらオレを蹴り飛ばした後、少女は嬢ちゃんに襲いかかった。

「イツテテ……ん、なんだ?」

蹴られた所を擦りながら少女と戦っているとケースに入っていたデユランダルが起動して魔力に似た波動を放ちながら空中浮かび上がった。

「デユランダルはもらっ……ウアッ!？」

「させるものかあ!」

それを見た少女がデユランダルを奪おうと飛び上がり手を伸ばそうとしたが、その直前に嬢ちゃんが確保した。だが、デユランダルを手を取った嬢ちゃんが突然黒く染まつたと思うとデユランダルの形が黄金の剣に変わり先ほどとは比べ程にならない魔力が溢れでた。

「グウウウウウ……アアアアアアアアアアッ!!」

「あ、あれはまさか聖剣エクスカリバーカッ!ーバアアアアアアアアアアッ!」

そして、嬢ちゃんはデユランダルを振り上げ極大の光の斬撃を（何故か）真っ先にオレに向けて振り下ろし、オレの身体は消滅した。

・ ・ ・

そんな訳でオレはこのムリゲーを突破するためにオバサンの転倒した車を起点に何度もリトライをした。

——何度もな。

——リトライ8回目——

嬢ちゃんからデュランダルを手放そうとどびかかろうとしたが、それより先に光に呑まれて死んだ。

——リトライ14回目——

起動したデュランダルがケースから出ないように身体ごと押さえ込んだが、ケースごと身体を貫かれて死んだ。

——リトライ42回目——

嬢ちゃんの斜線から逃げたが振り下ろした斬撃の衝撃で崩れた瓦礫に潰され死んだ。

——リトライ79回目——

嬢ちゃんより先にデュランダルを取ろうとしたが、鎧の少女が放った鞭がオレの心臓^{靈魂}を貫いて死んだ。

——リトライ104回目——

もう一度暴走した嬢ちゃんを止めようとしたが、首を斬られて死んだ。

—リトライ191回目—

後ろから羽交い締めにしたが振り払われると同時に真つ二つにされて死んだ。

—リトライ248回目—

頭を貫かれて死んだ。

—リトライ337回目—

光に吞まれて死んだ。

—リトライ427回目—

また死んだ。

—リトライ508回目—

また死んだ。

—リトライ666回目—

なんか見覚えのある道場で胴着を着た虎と銀髪ブルマにあった。なんか言ってたが

スルー。

虎師匠「ちよっ!?!私ら出番こんだけっ!?!」

ロリブルマ「世知辛いつス、シシヨーっ!」

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死

オレは、また死んだ

ーリトライ4242回目ー

「ハア、ハア、ハア………」
「たたく、ムリゲー過ぎるだろこれは……。何度やっても、何度逃
げても真つ先にオレを狙うのはおかしすぎるだろおい………」

まるでオレに恨みでもあるようなしつこさに疑問を持ちつつも、目線は聖剣モドキデュランダを
握りしめて唸り声を上げている嬢ちゃんから目を離さないように睨み付ける。

「グウウウウウウウウウウ……！」

「これ以上見せ付けるんじや——」

「おっと止めとけ。イタズラに刺激したらあつという間に消されるぞ」

嬢ちゃんを睨み、ヘンテコな杖でノイズを呼び出そうとした鎧の少女の腕を掴んで、後ろに下がらせる。

下がらせた理由はリトライしてる最中、この少女がノイズを呼び出し、それに刺激された嬢ちゃんが剣を振り下ろしたのを何度も見たからだ。（当然のようにオレも巻き添えになった）

「（さーてどうするか……4000以上リトライを繰り返してきて有効な手が何度かあって、それを組み合わせてリトライの最中何度も繰り返したが、その後の嬢ちゃんの攻撃がかかせなきや意味がねえ）……そういえば、あの道場でヒントを教えられたっけ？ 確か……」

『前々から観てたけどさー、最初に戦ってたデカブツに使ってたのをなんで使わないの？ あれを応用すればなんとかできるのにもったいなーい』

『要するに、あの斬撃を避けたいんなら動きを止めるんじやなく、鈍らせると同時に視界を隠してみたら？』

「動きを止めて鈍らせる……ね。ハ、なら一丁やってみますかね！」

そう言ったオレは右歯齧咬ザリチエと左歯齧咬タルウイを握りしめ、獣のような体勢で嬢ちゃんに向かって駆け出した。

—ギロツ—

「グウウウウ……ガアアアアアアアアアアアツ!!」

「おっと、そうはさせねーよ！」

こちらを睨み付けた嬢ちゃんが、デュランダルを振り上げようとする前にオレは両手の右歯齧咬と左歯齧咬を投擲した。

「ガアアツ！」

「簡単に防がれるのはわかってんだ、よつと！」

それをデュランダルから片手を離して空いたその手で易々と防がれ地面に突き刺さるが、オレは嬢ちゃんの周りを走り、時には左右に動きながらも一度手元に投影した

右歯齧咬と左歯齧咬

牙を再び嬢ちゃんに向けて投擲した。投擲した二本の牙の内左歯齧咬タルウイが嬢ちゃん

に当たらない位置の地面に突き刺さるとそれに過敏に反応してデュランダルを構える。

「……ハ。リトライを通してわかったが、その状態のオタクはノイズやあの鎧女より

真つ先にオレを殺そうと追ってくる！まるで獣の本能のように馬鹿正直になあ！」

「グウウウウウウ……ガウアアアアツ!!」

その言葉通り、今の嬢ちゃんは獲物を殺そうとする本能を丸出しにした獣そのもの。ほんの少し刺激するだけで即座にこちらの動きに反応するのを見て、オレはニヤリと口角をあげる。

——まあ

その反応が良すぎるのがオタクの弱点だな

次々と 右歯噛咬と左歯噛咬 牙 を投影しては投擲を繰り返し、嬢ちゃんが剣を振らせる隙を作らせな

いように何度も投擲を続ける。

「(仕掛けは上々……!) そんなじゃあ、獣狩りといくぜっ!」

嬢ちゃんの周りが投擲した 右歯噛咬と左歯噛咬 牙 だらけになったのを確認したオレは両手にもう一

度投影した右歯噛咬と左歯噛咬を嬢ちゃんに投擲してから、地面を駆け出した。

「アアアアアアアアツ!!」

「そこだ! 起きろ オ右歯噛咬、バ左歯噛咬ツ!!」

嬢ちゃんは投擲を止め、近づいてきたオレを今度こそ殺そうとデュランダルを振り上げたが、それをオレは嬢ちゃんの目の前にある斜めに突き刺さった数本の ザ右歯噛咬と エ左歯噛咬に魔力を流し込むと——。

——ガキインツ!——

「ガッ!?」

嬢ちゃんの周りに突き刺さっていた数本の右歯嚙咬と左歯嚙咬の剣身が伸びて、嬢ちゃんの身体を傷付けないようにデュランダルごと拘束した。

「ハッハアツ!どうよ即席の牙の檻は!その状態のオタクは俺を殺そうとする時必ず数秒の隙を作る!たった数秒だろうと俺にとつたら充分過ぎる時間よ!」

ようやく動きを止める事が出来て笑い声をあげてしまったが今まで5000回目内で死を回避できなかった俺にとつちやアテンションが上がるってもんよ!

さてと、サツサとその手に持つ剣を外して嬢ちゃんを元に戻してやるとする……

「グ、ウウウウ……ガ、アアアアア ■■■■■■■■■■■■ ツ!!」

——ピシツ、バキバキバキバキ——

「……………うっそだろおい」

身体の周りを右歯嚙咬と左歯嚙咬の牙の檻に囲まれているのに、黒く染まった嬢ちゃん自身に食い込む牙を気にせず、それどころか逆に罅を入れてやがる!!

(オイオイオイオイ!!低ランクとはいえ宝具をただの筋力で罅を入れるとかどんだけだよ!!?)
つか、食い込んだ肌から血が流れてるのに痛みも感じないとか、自我どころか痛覚も肉体のリミッターもぶっ飛んでいるのかよ!!どこのバーサーカーだよフザケんなっ!!?)

「さあ、大盤振る舞いだ！滅多に見れねえ幻想の花火を見せてやらあつ！！」

—弾けろ！壊れた幻想！！—
ブローケンファンタズム

その言葉を叫んだ瞬間、真つ二つにされた右歯噛咬と左歯噛咬に込められた魔力が破裂し、その後に黄金の斬撃が振り下ろされ爆風と爆煙が工場一体に沸き起こった。

◇ ◇ ◇

「……っ、ハア……っつかれたあつ！」

ブハアツ、と溜まった息を吐き出した俺はどかりと瓦礫まみれの地面に座り混んで正直な気持ちを書いた。

ブローケンファンタズム
あの時使った壊れた幻想で起きた爆発で暴走した嬢ちゃんの視界を奪う事で動きが一瞬鈍り、俺を見失った嬢ちゃんは構わずそのままデュランダルを振り下ろし地面が爆発、それに起きた爆煙を利用して、オレは唯一の取り柄の俊敏で懐に近づいて、嬢ちゃ

んの腕を取つてからその勢いで背負い投げの要領で地面に叩きつけた。

「まったく、こちらの苦勞も知らねーで氣絶してまー。手間かけさせさんな」

チラリと視線を横に向けるとギアの装着が解け、眠つてるように氣絶した制服姿の嬢ちゃんの顔を見て思わず愚痴を呟く。その反対側には輸送前とは違つて騎士王の聖劍に負けず劣らずの金色の劍になったデュランダルが地面に野晒しにしてある。

「しつこしまあ、鈍らせると同時に視界を隠せばいいって無理を言うなあ、あのロリブルマ」

空を見上げて、夕暮れに染まつた空をバックにドヤ顔で腕を組むロリブルマの姿が見える。まあ、幻覚だろうけど。

— 『ちよつとオツ!』 —

「お疲れ様、アヴェンジャー」

空を見上げてみると俺達の元に白衣が少し煤けたオバーもとい、了子さんが瓦礫を避けながら歩いてきた。

「お?了子さんもお疲れさん。あの爆発で無事だったかのか」

「ええ、概ね無事よ。しいていうなら髪の毛の先が焦げたのと愛車が御臨終したことね」

「ハツハアツ！まあ、命あつての物種だ。そのまま死ぬよかマシなほうだろ！」

「……そうね、無意味に死ぬよりかはマシなほうね（ようやく覚醒したデュランダルを手に入らずに死んでしまったら元も子もないからな、それに……）」

チラリと了子さんが視線を気絶してる嬢ちゃんに向けた後、次に地面に座り混んでい
るオレの顔を見てくる。

「ん？なんだ？何か俺の顔に付いてるのか？」

「ううん、何でもないわ。あら？弦十郎君が寄越してくれた処理班がきたのね。私はお
仕事に戻るから、響ちゃんの事よろしくねアヴェンジャー」

そう言った了子さんは笑顔を見せた後、現場に到着した事後処理班達の手伝いに向か
い、オレは何か引つ掛かるのを感じながらその姿を見送るしかなかった。